

藤田幽谷の尊王攘夷論

久野勝弥

ただいま御紹介頂きました久野でございます。お陰さまで水戸学講座本年度の五回目を迎えまして本日終講ということになりました。皆様方の御協力を冒頭ではございますがお礼申しあげます。

本日の幽谷の尊王攘夷論では、当時の世界情勢をどのように見るか、ということとはなかなか難しいことですが、文字どおり考えれば、幕末の世界情勢、その中で尊王攘夷というものがどういう位置にあるのか、ということが中心であろうと思います。歴史というものは、その前の段階というものがありまして、大変複雑なものであると言う事を知って頂いて、本題に入りたいと思います。

その前段階と言うものについて、ハンチントンの『文明の衝突』という本がありますが、大変よく読まれました。此の本は、世界の二極冷戦構造が崩壊しまして一極集中になって、そのアメリカの世界戦略というものが、学問の名を借りて、乃ち「文明の衝突」という名を借りて出されたのではないか、という気が致します。はつきりした証拠が有るわけでは有りませんが、この構図の中にコソボの問題が入っていましたこの問題を文明の衝突と言う事で、ユーゴの問題は複雑ですよ、と言う事を前もってハッキリと言っている。そのように書いた結果が、そのままの形で現実のものとして現れて来ます。

実はその事は、我国の近代史を理論付けた理論はマルクスの発展段階説でありますコミンテルンの指示を受けて二十七年テーゼと三十一年テーゼ、昭和三年に雑誌『労農』に載ったものを理論的根拠として明治維新を解釈したのは労農派、これは元の社会党系です、これは明治維新は不徹底ではあったけれどもブルジョア革命であった。しかしそれは不徹底であつたからもう一度革命を興す必要があるという理論です。それに対して、三十一年テーゼを元にして、日本には革命はまだ起こっていない、明治維新は絶対王制の確立である。ですから革命の必要がある。このように理論付けしたのが、講座派であります。これは昭和七、八年にかけて岩波から出版した『日本資本主義発達史講座』を理論的背景にして明治維新を理釈したものです。それは大正年間のロシア革命から昭和の初期の明治維新理解の背景になったのであります。そして昭和二十年敗戦の後、この講座派の理論が大体我国を席卷したのであります。

この講座派の理論を根本的に打ち砕いたのが「近代化史観」でありました。その

ひとつがライシャワの『日本近代の新しい見方』という「講談社新書」であります。これが昭和四十年代終りです。アメリカでは四十五年即ち日本が終戦を迎えた時に既に日本の学者を総動員して、こういうようなもの見方で日本論を書けという指示があったのです。これが近代化史観論として現れたのであります。従ってこれはアメリカ型の近代化論です。近代化論というのは、元々ヨーロッパ特にドイツの発展をモデルにして作られたのが近代化史観であります。ここで言うのはアメリカ型近代化論であります。四十五年から六十年の半ば、いわゆる工業化、高度産業社会、経済復興高度成長の時期に、この理論で歴史を解釈しましたので日本人は参ってしまいました。私もその頃高校の教員をしております、ライシャワの「日本近代化の新しい見方を見て物凄く驚きました。これは理解しやすいと思いましたが。それはどのような考え方かと申しますと、中国と日本とを比較して、資源が少なく人口が多く島国である日本が、なぜ近代化に成功して、あの広大な中国は資源が有り、人間も多いのになぜ近代化に失敗したか、その差は何なのか。と言う事を比較して、その中で一番ポイントに置いたのは、社会制度です。

中国では八%から十六%までが官僚として一番上に集まる。王制でありますから上ばかり見ていた。科挙制度で優秀な人物が一番上の官僚となる。下のことは何も見ていない。日本は封建制度で士農工商という区分があった。われわれは封建制度というものは発展段階説から言えば、前近代的なものであると教えられて来た。ところがライシャワの一派は、士農工商それぞれに指導者層が出て、農では二宮尊徳、商では鴻池とか鹿島とか三井とかいう指導者が出て、また長州・薩摩というように中央集権ではなく地方の自治の形が出来ていて、それぞれの身分の所に指導者層が出現した。そういう指導者達が改革をしなければダメなんだと言ったから改革が出来た。それで明治維新が成功したんだ。すごく分かりやすいでしょう。私はこの本を水戸二校の教員でしたから学校に持って行って、一生懸命にこれを説きました。

この封建制度というのは西洋と日本の二箇所にしかなかったものではない。だから西ヨーロッパと日本は近代化に成功したのである。このようにライシャワは書いています。

また江戸時代の教育にも注目しています。江戸時代の教育は、寺子屋から始まり各藩の藩校があつて、識字率が非常に高い、それが近代化に成功したもう一つの要点である。と説いています。その門下生のドアは『江戸時代の教育』、ジャンセンの『日本 二百年の変貌』、この人は坂本竜馬の研究もしています。ベラーの『徳川宗教』そのほかたくさんあります。

そしてそれに則つて永井道雄氏が『明治維新』などを書きました。このなかで一つだけ紹介しますと桑原武雄というフランス文学者がいます。労農派です。彼が「私もかつて後進国型ブルジョア革命と言った事もありましたが、そういう用語はもう使わないと思います。」と言わしめる程に、この近代化史観は影響がありました。あの桑原武雄の思想を一変させるだけの影響力がありました。

ところが、ジョン・ダワーがこの近代化史観を批判しました。「この近代化史観というものは日本の左翼の信用失墜を図る為に考え出された論である」と批判したのです。そして再軍備反対の声を消す為に、アジアにおける日本の優位性と資本主義陣営に日本を入れるために考えられた理論である。心理学的に日本再教育のプログラムを作成し、革命中国を日本のカウンタ・モデルにするんだと言うのであります。

これを私は見まして愕然といたしました。日本に入ってくる歴史学と言うものは必ず裏が有る。先程のハンチントンの『文明の衝突』ではないけれども、この本は、最終的には資本主義自由陣営が残り、アジアでは中国が日本を押さえてアジア文明を作るだろう、そのアジア文明は最終的にはイスラム文明と一緒にあって、イスラム文明と自由主義文明が衝突して、それが戦いの原因になるだろうというのです。

近代化史観は私にはマルクス史観よりも理解しやすいが、このところで問題は水戸学とか、明治維新を導いた先哲、努力した人々が顧みられていない、経済方面の渋沢栄一などは論じられているが、藤田幽谷とか藤田東湖とか会沢正志斎とかは全く顧みられていない。歴史の表面に現れて来ない。これはおかしい。近代化といっても産業が発達するだけが発達では有りません。そこに人間の努力がなければなりません。水戸の学問というものも評価されなければならぬ部分があるはず。ところがライシャワーの「日本近代の新しい見方」を見ましても、ジャンセンの「日本 二百年の変貌」を見ましても、水戸学は出て来ません。

その後ポストモダニズムというものがおこります。この近代化史観は、ベトナム戦争が失敗したことによってガラガラと音を立てて崩れてしまいました。アメリカの歴史観というものは、ここから変わりまして、七十年代の半ばから八十年にかけて、近代化史観を見直そうという風潮が出て参ります。近代化史観を乗り越えようとシカゴ大学を拠点として「シカゴ学派」というのが出て参りました。この学派は「イデオロギー」に注目しました。イデオロギーに注目したのは何か。ということについては私はまだ分析は出来ていません。しかし実際にはオームスの『徳川イデオロギー』これは徳川時代にはイデオロギーがあつたと捉えています。山崎闇

齋の崎門学派に注目しています。ただもしかすると水戸学がそこから発生してイデオロギーを形成したか？ という段階で止めてあります。

これは皇学館大学の谷省吾、近藤啓吾などの人々の成果をふまえながらこれを組み立てています。これを組み立てた背後にどのような目的があつたか、今のところ私には判りません。

この後を承けましてコシユマンの『水戸イデオロギー』が出ました。これは松本さんとか尾藤さんとかの水戸学に若干冷たい人々の論調を纏めて作ったものであります。しかし徳川イデオロギーを承けるものである、とハッキリ書いております。この本の水戸学の評価は、徳川イデオロギーを徹底的に生き抜いてそれを食いつぶしてしまつた。そして学問と政事の一致が特徴である、としています。弘道館記の中の「学問と事業その効を殊にせず」を高く評価しています。この辺のところは非常に意味深長です。学問と政治というものはその効を殊にしてはいけない。近代化史観でもその所が見えましたから、これは何かポストモダニズムでもシカゴ学派のこれを書いた理由は、何か有るのではないかと思うのであります。冷戦構造が崩壊して一極集中になつたでしょう。そのような段階になつた時にこういう研究がされると言う事は何を意味するのか判らないことであります。

さらに『水戸イデオロギー』では天狗党の行動が詳しく書いてありまして、これは「新しい政治空間の創造があつた」と述べています。幕藩体制の中を水戸から敦賀迄各藩の土地を通つて行く間に、同情するもの、討伐するものいろいろあり、新しい時代を見る見方を作つたんだ。ということが書いてあります。これがどう言う意味で書かれたのか、考える時間を頂きたいと思ふことでもあります。

幕末の世界情勢は既にお判りのように一番最初に鎖国と言う扉をトントンとノックしたのはロシアでありました。次に足でドンドンと蹴飛ばして来たのはイギリスであります。最後に拳でもつて扉を撃ち破つたのはアメリカでありました。詳しい事は時間の関係で申しませんが、丁度そのころ水戸は中断していた大日本史の編纂が再興される時期でした。立原翠軒がその中心であります。非常な努力家でありまして、本紀列伝の完成に全力を投入しました。この翠軒が、ロシアの接近に対して警告をします。常陸の国は海岸線が非常に長い、そこにロシアの船が出没する、次第に交易を要求して来ます。漁民の間では、何も恐ろしい事はないんだ、という感覚が出て参ります。これに対して最初に警告を發したのが立原翠軒であります。

しかし立原翠軒には尊王と言う考えはありません。水戸では義公以来尊王の気持ちはずっと持っていました、尊王と攘夷を結びつけて尊王攘夷という言葉の使用例は水戸の「弘道館記」が一番最初であります。この言葉は「論語集註」に「周室

を尊び、夷狄を攘ふ、皆天下を正す所以也」とありまして、このような概念はあったのであります。義公には中国というのは日本の事であつて支那の事を中国というのは誤りであるという「中国夷狄の弁」、それから「華夷内外の弁」という考え方はありました。「勤王」という言葉も有りましたがこれは昭和の初期くらいに流行つたもので江戸時代にはありません。

さて幽谷先生は攘夷と言う事は立原翠軒から受け継ぎますが、それに尊王と言う概念を結びつけて理論を構成します。これが後期の水戸の学問の出発点になりました。幽谷先生が生まれましたのは、安永三年で水戸城西下谷の古着屋でありました。天明六年、十三歳の時、「赤水先生七十寿序」これを作りました。序文と詩を作りましたが、この時にまた高山彦九郎のために「上野高山彦九郎王母八十八初度を賀す」という詩を作っています。高山彦九郎も会いに来ます。この二つの詩によつて水戸に天才有りと全国に知られました。長久保赤水や高山彦九郎の口から知れ渡りました。この十三歳の少年を訪ねて、幽谷十五歳の時、古河古松軒がわざわざ訪ねて来ます。問答して大変な秀才であると驚きます。

寛政三年十八歳の時、松平定信の求めに応じて『正名論』を書きます。これがいわゆる藤田幽谷の尊王論であります。

赫々たる日本、皇祖國を開きたまひしより、天を父とし地を母とし、聖子神孫、世明徳を継ぎ、以て四海を照臨したまふ、四海の内、之を尊んで天皇と曰ふ。八州の廣、兆民の衆、絶倫の力、高世の智ありといへども、古より今に至るまで、未だかつて一日も庶姓天位を奸す者あらざるなり。君臣の名、上下の分、正かつ蔽、なほ天地の易ふべからざるごとくなり。是を以て皇統の悠遠、國祚の長久舟車の至る所、人力の通ずる所、殊庭絶域、未だ我邦のごときあらざるなり。豈偉ならずや。

日本のいわゆる、国体論、日本の国体は万世一系であるということでもあります。赫々たる日本は、皇祖邇邇藝尊が國を開かれてから、天を父とし地を母として、代々明らかな徳をお継ぎ遊ばして、国内を照り輝かしております。日本では、是を尊んで天皇といえます。この天皇という言葉の起原は、聖徳太子が隋に送った国書に「東の天皇西の皇帝に申す」というところから始めて出て参りまして、この推古天皇の時代からずっと使われています。八州の広い国土、多くの国民、其の中には絶倫の力をもっていた人も有るでしょう。また歴史に載っていないけれどもすばらしい智慧を持っていた人もあつたでしょう。けれども昔から今日まで今だかつて一日も庶民が天皇の位を冒すということはありませんでした。弓削の道鏡というような人もいましたけれども、革命という形で国体が変わつたことはありませんでした。

君臣の関係、名分、上下の分、こは正しくそして嚴重でありまして、天と地がかえることができないのと同様であります。これを以て皇統の悠遠、國祚の長久というもの、舟や車の至る所また人の力で行ける所、世界中何処にも我が国のごときものはありません。この事、実はまことに偉大なものではありませんまいか。これは非常に長い文章でありまして、終わりの所にもう一つ

今それ幕府は天下国家を治むる者なり。上は天子を戴き、下は諸侯を撫するは霸主の業なり。其の天下国家を治むるは、天子の政を撰するなり、天子垂拱して政を聴かざること久し、久しければ則ち変じ難きなり。幕府天子の政を撰するは、またその勢のみ。異邦の人言へるあり、天皇国事に與からず、唯国王の供奉を受くるのみと、蓋し其の実を指すなり。然りといへども、天に二日なく、地に二王なし。皇朝自ら真天子あり、則ち幕府宜しく王を称すべからず。則ち王を称せざるといへども、其の天下国家を治るは王道にあらざるはなきなり。

(正名論・原漢文)

これは先程も申しましたように、老中松平定信、白河樂翁に命ぜられて、十八歳の藤田幽谷が書いた文章であります。十八歳の青年幽谷が幕府の中心人物であった松平定信に差し出した文章です。

今それ幕府は天下国家を治る者なり。これは事実であります。上は天子を戴き、下は諸侯を撫するは霸主の業であり、国家を治めるのは天子の政を代行するにすぎないのであるのに、実際は天子は手を拱いて政を幕府から報告することは無い。ひさしく時間が経ちますと、報告しないという習慣を変化させることが難しくなります。天皇の政治を代行していると言うことは、時代の勢いにすぎません。外国の人が言うであります。『日本の天皇は政治に関係していません。ただ国王（將軍）のお供を受けるのみであります。』これは事実を指しています。しかしながら、この日本の國には、二人の王様はありません。日本には天皇と言う本当の天子がおられます。則ち幕府は王と称してはなりません。実際に政治を行っているのは幕府でありますから、天下国家を治める政治の方法は王道でなければなりません。これは漢文体で書いてあります。私なりの読み方を致しましたから、資料にお使の場合には原文で読み直して下さい。

次は『及門遺範』に出て参ります文章です。『及門遺範』は享和二年（一八二二）に幽谷は家塾青藍舎を開設しました。その門弟の中で最も有名な方が会沢正志斎であります。この人が書いたもので、幽谷の教育の内容を書いたものであります。

先生春秋尊王攘夷の義に原ずき、尤も名分を謹む、君臣上下の際、華夷内外

ります。静かに治まることを説くのは、手なが猿に木のぼりを教えるようなものです。これでは混乱するようですが、孫臏は戦国の斉の人であります。魏と戦っておりませんでした。その作戦として兵隊の竈を潰して食事が出来なくなっていました。そうしますと兵隊が逃げますから兵力が少なくなりました。兵力がないと見せかけて魏を敗つたのです。これが作戦でした。ところが虞詡という人は後漢の人で羌という夷狄と戦っていたのでありますが竈を増やして兵力を増強して羌を伐つたのであります。

これらは好んで反対の事をしたものではありません。各々時宜に従って行った作戦であります。時機というのがあります。時と場合というのが重要なのです、と言っているであります。

昔北条氏政を鎌倉に為すや、蒙古の使を執り、其の首を斬り、以て明かに彼に絶を示す。乃ち諸州に令して曰く、蒙古まさに我襲はんとす、備へざるべからず。天下の將士、宜しく儉約に務め、軍用に資けしむべしと。是に於いてか、將士人人備を為す。遂に彼の十万の衆を西海に殲するを得たり。宗社祐を垂れ、神風威を助くに頼むといへども、抑北条の経略宜しきを得るの力なり。

こここのところは省略してもよかったです。再来年の大河ドラマは「蒙古襲来」だそうですから入れました。北条時宗は経略宜しきを得て蒙古を敗ることができたではないか、と幽谷は言いたいのであります。

前年虜使の来り、甘言重幣以て我を誘ふ、恫疑虚喝以て我を威す。廟堂人無く、礼して之を遣る。一日の苟安を偷み、天下の士気を惰す。堂々たる幕府、曾ての北条に若かざらんや。閣下縦に能く幕府に建議し、既往の過を救はざらんや。亦何ぞ一国の士大夫を激励するの術無かるべけんや。夫れ無事の日に在りて、戦を教ふるの事は、固より平地波起るの嫌ありとなす。然れば有為の君、安ぞ危を忘れず、必ず内政を作し、以て軍令を寓す。北虜の警あるより、幕府屢嘗て令を下し、縁海諸侯をして予め不慮に備しむ。此強兵の良機、失ふべからざるなり。閣下何ぞ憚りて敢て為さざらんや。臣竊かに閣下の為に之を惜しむ（丁巳封事）

意味は寛政四年にラックスマンが来ました。お土産を持って来まして交易を誘いました。一方で脅かして威圧を加えました。ところが幕府に人無く、礼を尽くして帰してしまいました。

「閣下」は水戸の文公であります。殿様はなぜ幕府に建議して、この危機を救わなかったのでしょうか。どうしてまた、国内の人々を激励しなかったのですか。平和な時期に、戦をせよという事は国内に波瀾が起こる心配があります。そうである

からこそ名君であられる貴方は、平和な時に危機を忘れず、内政を正し、軍令を何時でも発動できる様常々心掛けなければなりません。ラックスマンが来てより幕府はしばしば警報を発して沿海諸侯に不慮の災禍に備えさせたではありませんか。幕府に憚ることなく兵備を増強できる好機を失ってはなりません。殿様なぜ逡巡しておられるのでありますか。臣幽谷心から殿様の為にこれを惜しむものであります。

これは水戸藩政の一部分であります。文公の失政の幾つかある内の一つであります。す民政も宜しく無い。攘夷も宜しく無い。それらを失政のひとつとして言うのであります。ですから文公は怒られます。「無礼である。逼塞を命ずる。」と言う事になりました。これが許されるのは約二年の後に義公の百年忌がありました。此の時に許されましたから約三年程逼塞を命ぜられていました。

先生 素より戎夷の辺を窺ふを憂ふ。寛政甲寅、俄羅斯（オロシア）東蝦に來り、通市を乞ふ。先生其の情偽を察し、古今戎狄の形勢を推求し、瞭然掌を指すが如し。且つ其の虚誕誇張の妄説を辨破す。（六千年の史書具に存し、亦中世に大洪水あり、人物蕩然復存するなしと云ふが如きは、其の言自ら相矛盾す。其の余の論破する所、今尽くは録せず。）明らかなること火を觀るが如し。而して謂ふ脱西夷をして志を得せしめば、宇内晦暗、天地は長夜と為らんと。安之を聞きて茫然自失、身を措く所無きが如し。（及門遺範）

先生は外国が日本を伺っている状況を非常に心配しておられました。ロシアが根室に来て通商を乞うた時、先生はこれは本心ではない、外国の形勢を考えて説明し、嘘言だと言う事を察します。そしてロシア側の言分を一つ一つ論破したのであります。外国には六千年の史書がある、これは旧約聖書のことです、また中世に大洪水があつた、これはノアの方舟です。その時に人間はみな死んでしまったと言うが、今ここに我々はいるではないか。と反論します。当時、攘夷を言う人は外国の事情に非常に明るく、開国を言う人は外国の事情に詳しくなかつたと言えます。

会沢正志斎は、ここからロシアの事情を深く研究します。外国の文献は読めませんから漢文と国書、例えば新井白石の書いたものなどによって、関係するものは全部抜書きいたしました。それが後の大津浜事件に大変役立ちます。また文化五年のフェートン号事件がおこります。これは長崎にイギリス船がオランダの国旗を掲げてオランダ船に偽装して入って来て乱暴した事件です。文政元年にはイギリス人のゴンドルが浦賀にやって来ます。文政五年にはまた英船が浦賀に来ます。六年には、また哀公に建白します。しかしこれは無視されます。

その後大津浜事件がおこつたのであります。これが文政七年です。薩摩では宝島という所に英船が上陸しました。この時富田逸民と会沢正志斎が大津浜に急行し

ます。そして地図と着物の色と手まねで筆談をして『諳夷問答』という書物を書き残しています。十二人のイギリス人が鉄砲を持って上陸して来ます。「お前は何処から来たのか」「ロシアか」「ロシアでない」「アンゲリアだ」「お前の所の言葉は「A B C Dと書きます。「この発音は「地図を示して「何処から来たか」「どのくらいかかって来たか」月の絵を書いて、32と書きました。月が満ち欠けして三十二日かかった。「何しに来たか」水平線を書いて、鯨の絵を書いて、「鯨を取りに来た」「何処から何処迄がお前の国の領土か」地図のイギリスの本国からずーッと辿りましてインドから、清の南京の所からずーっと辿って、何回やっても日本がその中に入ってしまうのであります。それで会沢正志斎は大いに怒りまして侵略の意志有りと言うので『諳夷問答』を書いて哀公に建白をします。

その時幽谷は、自分の子供の東湖に「あの英人を斬って来い。」と命じます。

「自分の家には女の子ばかりで男はお前だけである、お前が死ねば女の子しか残らないけれど、外国に馬鹿にされてなんにも出来ないと言う事は、将来の問題に禍根を遺すことになる。だから行って斬ってこい。」ということで水盃で別れようとしている時に、幕府の役人が「英国人を帰してしまつた」という通報がありました。

このときの幽谷の呈書があります。

一 此度大津村へ上陸致し候に付、天文方通詞下り候へば、定て相分り候事と思召され候由、愚案にはたとひ通詞にて言語文字は相分り候共、真実の虜情は相分り申間敷候。御代官等地方之俗吏同道罷下り候上は、必定一昨年浦賀之節の如く鯨とりの処薪水に乏しく罷成候て、上陸杯と取つくるひ申立候儀と存じ奉り候。是は全くこしらへ物にて、一向あてには相成間敷候。是度会沢恒蔵等出張、地球図を指點いたし、彼夷人と問答之次第御目付共迄書出候。定て追高覧にも備候事と存じ奉り候。恒蔵筆談は行届兼候へ共、異国人と問答、其の情を推求分明に相成候事、新井筑後守が罷馬人を詰問いたし候已來の手際に御座候。全く薪水等に乏く相成上陸仕候はば、奴隸同様の夷人計遣し申すべき筈の処、一船の惣司にも相加候加比丹罷越候上は、一と通之儀には之有間敷旨、此方老職の内にも心付候者も御座候（甲申呈書）

天文方というのは、通訳は天文方に属していました。天文方は暦とオランダ語の翻訳をしていました。新井白石がローマ人のヨハンストツチを詰問したことがありました。会沢正志斎の詰問はこれに優るものだと思います。これに対して哀公はどう答えたかというと、

異国人の儀に付存意之趣、尤には存候得共、先達て浦賀へ着船致候船と同じ

事の様に見え候。右は全水薪等乞候事に之有り候。さし当り何等之儀も之無き事と存候。此度上陸致候間、天門方通事下り候得ば、さだめて分り候事と存候。如し存意にても之有り候はば申出べく候。何もいそぎ候事に之なき様、拙者は存候。先生は如何に候や。から学者は畏れすぎ、武人はあなどりすぎ候様に之有り候。只只農行時人を費候所こまり申候。いづれ存意趣は書付にても申述べく候。承置、追追行れべき儀は行ひ申すべく候。以上

藤田次郎左衛門へ

(文政七年六月六日 哀公よりの親書)

殿様が、このようなことですからいくら幽谷が下から、外国船が心配だと言っても殿様は、「なーに、大した事はないぞよ、静かな方が良いんだ、」という考え方であります。「学者は恐れ過ぎている、」と言うのです。

さて、幽谷の尊王攘夷論というものはどういふものかと言うと、例えば、フエートン号事件のあつた文化五年の元旦の詩を見ればわかります。

戊辰元旦の詩

春来一夜斗杓を廻らす

北を顧み還ち憂ふ胡虜の驕るを

筆を投じ自ら憐む班定遠

家を忘れ誰れか擬せむ霍嫫姚

長蛇まさに畏るべし神兵の利

粒食曾ち資す瑞穂の饒

宇内の至尊天日の嗣

須らく万国をして皇朝を仰がしむべし

北極星は動かないけれども、北方からはロシアが南下してくる、班定遠とうのは後漢の班超と言う人です。この人が外国を撃ち破つたことを思うについても、自分の周囲が悲しい。嫫姚は匈奴を伐つた漢の武帝の名将であります。このような人々のことが忘れられません。外国の勢力を長い蛇に例えて、我国には草薙の剣があるぞ。日本は瑞穂の国と言われたように食料は豊富にあるぞ。日本の中心には天津日嗣の天皇がおわします、オロシアでもアンゲリアでもよろしく日本の天皇を仰がせるような状態にしたいものだ。

これが幽谷の思想の根源です。従つてこの詩の中には幽谷の尊王攘夷の考えが統べて含まれていると思います。

御静聴ありがとうございました。

(平成十一年十二月五日講座)

(茨城県立教育研修センター調査員)